

建築家・南信の経歴と住宅作品にみられる特徴について

MAKOTO MINAMI: HIS CAREER AND RESIDENTIAL DESIGNS

井上祐一*, 初田 亨**

Yuichi INOUE and Tohru HATSUDA

This paper discusses the architectural style and work of Makoto Minami, one of Frank Lloyd Wright's apprentices, over the course of his three major periods: Sendai/Tokyo, Hyogo/Osaka, and Manchuria. During the Sendai/Tokyo period, Minami had a partnership with Arata Endo. During the Hyogo/Osaka period, he established his own architectural firm. During the third period, he established an office with Endo in Manchuria. Of the 14 designs completed in his second period, 11 of them have much in common with design by Wright and Endo. Minami's style shifted after 1932, when he used 'trockenbau' dry construction on his own house.

Keywords : F.L.Wright, Arata Endo, Imperial Hotel, Koshien-Hotel, Trockenbau, Osaka

ライト, 遠藤 新, 帝国ホテル, 甲子園ホテル, 乾式工法, 大阪

はじめに

フランク・ロイド・ライトが設計した、帝国ホテルの建設には多くの日本人スタッフが従事していたことは知られている。ここには、いわゆるライトの弟子とされる遠藤新をはじめ田上義也、土浦亀城をはじめとして、南信、河野傳¹、内山隈三²、渡辺己午蔵、藤倉憲二郎³、伊藤清造⁴、剣持某、高橋某⁵がいる。

ライトの弟子の一人である南信は、後に遠藤新とともに設計事務所を営んだが、遠藤の陰に隠れ、その経歴についてはあまり知られていなかった。また帝国ホテル建設以降に、南は遠藤新とともにライトのスケッチによる山邑太左衛門別邸を完成させたことでも知られているが、遠藤との共同事務所で彼が担当した作品や、彼が一人で活動した時期の作品については、これまであまり明らかにされていない。本稿は、南が一人で活動した時代に着目し、雑誌資料および聞き取り調査等によって、新たに判明した南信の経歴および建築作品について報告すると共に、彼の作品の中でも数の多い住宅に見られる作風について言及するものである。

南の経歴については、主に彼の義妹にあたる南範子氏ならびに甥にあたる針岡繁氏からの、聞き取り及び提供資料、あるいは当時の建築雑誌『建築雑誌』『建築と社会』『新建築』によっている。また、

南の作品(計画案を含む)については、主として当時(1923~1935)の建築雑誌『建築雑誌』『建築と社会』『新建築』『建築画報』『建築世界』『住宅』及び書籍『アルス建築大講座』『近代建築画譜近畿篇』について調査し、確認できた作品について報告する。なお、1作品については、1980年発行の『日本基督教団仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』によっている。

1. 南信の経歴

南の経歴を大別すると、仙台および東京時代、兵庫および大阪時代、3)満州(現中国東北部)時代にわけて考えることが出来る。

1) 仙台および東京時代

南家は元仙台藩の士族で、南信は小学校校長を勤めた父寛壽と、天文学者平山清次の姉である母きわの長男として、明治25年(1892年)2月13日に仙台市(本籍地:青葉区木町通二丁目三〇番地)で生まれた。後に、宮城県立仙台第二中学校および第二高等学校を経て、大正6年(1917)に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し⁶、日本トラスコン鋼材に入社した⁷。その後、帝国ホテルの建設に参加している。ちなみに南は、第二高等学校および東京帝国大学工科大学建築学科で遠藤新の3年後輩に当たる。なお、アメリカの

* 文化女子大学短期大学部生活造形学科 助教授

** 工学院大学工学部建築学科 教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Living Arts, Bunka Women's Junior College

Prof., Dept. of Architecture Faculty of Engineering, Kogakuin University, Dr. Eng.

建築家フランク・ロイド・ライトが設計し東京の日比谷に建設が進められた帝国ホテルは、ライトの帰国後一年が過ぎた大正12年9月1日に竣工披露の日を迎えたことはよく知られている。ライト帰国後の大正11年10月には「遠藤南建築創作所」⁸の名称で遠藤新と共に設計事務所を開設している。この事務所名については、遠藤新の次男である楽氏に寄れば、昭和20年の戦災で焼けるまで遠藤の事務所⁹には、遠藤の字で板に筆書きされた「遠藤新・南信建築創作所」の表札が掛かっていた。しかし、山邑邸建設の後には、分かれて南は独立したという¹⁰。

2) 兵庫および大阪時代

南は帝国ホテルの建設工事がまだ完成を見ない大正12年(1923)の春に、「兵庫県武庫郡精道村芦屋山坂、山邑別邸方」に住所を移転している¹¹。

南が芦屋に転居したのは、山邑太左衛門邸の現場に常駐して設計監理に当たるためであることは、移転先の住所からみて明らかであろう。ライト設計の山邑邸施主の孫にあたる山邑芳子氏によれば、山邑別邸はライト設計の建物が建つ以前には和風の建物で、南はその一室を事務所として使用していたという¹²(当時の写真が残っている)。

山邑邸が竣工した¹³翌年、『建築と社会』の大正14年7月号には、新入会員として南の氏名と住所が掲載されている¹⁴。住所は「大阪市北区堂島ビル3階202室」で、この時には、ここに居所を設けていたことが分かる。また、同年9月には「南建築事務所」の名称が使われており¹⁵、所在地は記されていないが、『建築と社会』の大正15年12月号に次の移転先が「兵庫県芦屋山坂1537」となっている。このことから考えれば¹⁶、「南建築事務所」の当初の所在地は、既出の「堂島ビル」と考えられる。また、南の義弟の伊東和雄(1907～1933)が、大正14年9月に「遠藤南建築創作所」から「南建築事務所」に移籍している¹⁷ことから、大正14年に南が独立した可能性が高いと判断できよう。なお、『建築と社会』大正15年12月号と同じ芦屋の住所は、『新建築』の昭和2年3月号の広告にも見られ、ここでは「南建築事務所」の名称が記されている¹⁸。

その後、『建築雑誌』の昭和3年4月号には、「事務所新設、大阪市中ノ島大阪ビル5階」という記事があり、このころ、南が大阪の中心地である中ノ島に事務所を構えたことが分かる¹⁹。その後、『建築と社会』の昭和5年4月号には「大阪ビル南建築事務所」および昭和7年10月号には「大阪・北・宗是町、大ビル5階」とある²⁰。この「大ビル」は先の「大阪ビル」と所在地の表示は異なるものの、当時の株式会社大阪ビルヂングが所有していた「ダイビル本館」と考えられる²¹。昭和3年4月頃に「大阪ビル5階」で開設した設計事務所が、昭和7年10月にも同所に置かれていたことが明らかである。なお、所在地は移ったものの、大正14年9月から昭和7年10月までの期間は、「南建築事務所」の名称が使用されていることも明らかである。

また、このころ南は兵庫県武庫郡良元村鹿塩(現宝塚市仁川北)に自邸を建設している。なお、南の義弟の伊東和雄は、昭和8年7月から南の自邸で病気の療養をし、同年9月16日に没している。

[表1]南信年譜 南範子氏、針岡繁氏の証言・提供資料、『建築雑誌』『建築と社会』『新建築』および『伊東和雄小照』により作成

西暦	和暦	
1892	明治25年2月13日	南寛壽、きわの長男として仙台市に生まれる。
1917	大正6年	宮城県立仙台第二中学校、第二高等学校を経て東京帝国大学工科大学建築学科卒業
		帝国ホテル建設に従事
1921	大正10年2月3日	伊東賢治次女雪子と結婚
1921	大正10年頃(?)	山邑邸(竣工13年)の現場監督のため芦屋に移住
1922	大正11年10月	「遠藤南建築創作所」の名称
1923	大正12年5月	「兵庫県武庫郡精道村芦屋山坂、山邑邸方」
1925	大正14年7月	「大阪市北区堂島ビル3階302室」
1925	大正14年9月	「南建築事務所」の名称
1926	大正15年12月	「転居 兵庫県芦屋山坂1537」
1927	昭和2年3月	「南建築事務所」(兵庫県芦屋山坂1537)
1928	昭和3年4月	「事務所新設、大阪市中ノ島大阪ビル5階」
1930	昭和5年4月	「大阪大ビル南建築事務所」
1932	昭和7年	兵庫県武庫郡良元村鹿塩(現宝塚市仁川北)に自邸竣工
1932	昭和7年10月	「南 信 大阪・北・宗是町、大ビル5階」
1933	昭和8年	自邸写真に「義兄の新邸」とある
1933	昭和9年	渡満
1935	昭和10年頃	遠藤新・南信建築設計事務所(新京特別市浪速町2丁目4番地)所員;新田三郎、林 実、佐藤高寿、ほか1名
1943	昭和18年	肺結核のため療養
1946	昭和21年11月	病院船で帰国
1951	昭和26年3月20日	仙台にて没する。

彼の追悼集『伊東和雄小照』(昭和8年11月)に南信自邸の写真が「義兄の新邸」として載っている。南の義妹である南範子氏によれば、伊東の死の前年に南自邸が竣工したとのことであり、南の自邸の建築年代は昭和7年と考えてよからう。

南の自邸は、昭和9年4月に南の妻雪子の兄である伊東俊雄(南範子氏の父)一家に引き継がれ、平成2年(1990)までほぼ原型のまま住み続けられたが、1994年に取り壊された²²。

3) 満州(現中国東北部)時代

その後、南信は自邸を手放し、満州(現中国東北部)に渡っている。渡満の時期は明確でないが、南は『建築と社会』の昭和4年10月号から昭和8年12月号まで委員会委員等に名を連ねている。しかし、それ以降、彼の名前の掲載が見られないことや、昭和9年4月頃に自邸を手放している²³ことから判断しても、昭和9年の4月には渡満していたとするのが妥当であろう。なお、昭和8年10月の『住宅』に掲載された、南信自邸の解説文で南は、「過渡期的な自分」という表現をしている。

渡満後の居所については、新京で南の事務所にしばらく滞在していた、南の甥である針岡繁氏の証言によれば、昭和10年頃には新京特別市(現長春市)浪速町2丁目4番地に設計事務所があり、「遠藤新・南信建築設計事務所」の看板が掲げられていたという²⁴。また所員には、新田三郎、林実、佐藤高寿、他1名がいた。新京において、遠藤新と共同で再び設計事務所を開設したことが分かる。

南は昭和18年に結核を発病し、以後、新京郊外の孟家屯の療養所で療養を続けていたが、終戦後の昭和21年11月に病院船で日本に引き上げてきた²⁵。その後、昭和26年3月20日に仙台にて没している²⁶。

2. 南信の作品

南信は、「南建築事務所」時代をはさんで、遠藤新と建築設計の事務所を設立している。遠藤と共同で事務所を設立している時代の作品については、どの作品が、南信が主に担当した作品であるか定か

ではない。ここでは、南信が主に設計したものが明らかな、「南建築事務所」時代の作品、なかでもその数が半数以上を占める住宅について特徴を考察する。

1) 作品掲載誌

南の作品についての記事は、雑誌の『新建築』『建築と社会』及び『住宅』に掲載が見られる。『新建築』には大正15年2月号(第2巻第2号1926)をはじめとして昭和4年4月号(第5巻第4号1929)までに、13件の掲載記事が認められる²⁷。また、『建築と社会』には昭和5年1月号(第13輯特集号)に1件²⁸、『住宅』には昭和7年6月(第17巻第6号)から昭和9年9月(第19巻第9号)までに、3件の掲載記事が認められる²⁹。[表2-1]

雑誌以外の書籍では、『アルス建築大講座(合本)第1巻』および『同第3巻』(1930)に各1件³⁰、『近代建築画譜近畿篇』(1936)に1件³¹の掲載記事が確認できた。また、『日本基督教団仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』(1980)に1件確認した。

2) 掲載作品

南信の作品について、当時の建築雑誌『新建築』『建築と社会』『住

宅』及び書籍『アルス建築大講座』『近代建築画譜近畿篇』の掲載記事、あるいは『仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』から、合計19の作品が確認できる。19のうち17の作品(17の内の1つは、プランが2案ある。)は図面及び写真あるいは解説文等があるが、他の2つについては名称のみの掲載で、作品内容は不明である。内容が明らかな17について用途ごとに作品をみると次のようになる。

(①から⑰の番号は[表2-1][表2-2][表3]および図版に示した番号)

住宅(11作品)

①K氏の住宅、③(③-a)菅野真湛氏の住宅、④-1および④-2二十坪前後の家、⑦某氏の家、⑧郊外に建つ家、⑩某氏の家、⑪住宅、⑬亀高邸、⑭新荘氏邸、⑮鹿姑居(自邸)、⑯高田氏邸
集合住宅(1作品)

⑨会下山のアパートメント

事務所付住宅(1作品))

⑥事務所付住宅

店舗(2作品)

②第一屋、⑫山の喫茶店

医院(1作品)

⑤(⑤-a、⑤-b、⑤-c)櫻根医院

教会(1作品)

⑰仙台バプテスト教会

なお、名称の掲載のみで用途不明の2作品は、⑱神戸婦人同朋会館と⑲日本絹綿紡績会社である。

以上19作品のうち、資料図面等により⑧と⑩および⑪と⑬は夫々同一の建物であることが判明し、建物数は17軒(但し④-1、④-2は1軒とする)と確認できた。但し、建物用途および概要が確認できた建物は15軒である。また15軒の内、掲載写真により②第一屋、③菅野真湛氏の住宅、⑤櫻根医院、⑬亀高邸、⑭新荘氏邸、⑮鹿姑居(自邸)、⑯高田氏邸、⑰仙台バプテスト教会の8軒が建設されたことが判明したが、他については、実際に建設されたことの確認はとれない。

3. 住宅作品にみられる特徴

建築内容が明らかな15軒の南の作品について、外観、平面および室内についてそれぞれの特徴をまとめたものが[表3]である。

このうちの、9軒の住宅について、特徴を見る。

1) 外観の特徴

(1) 屋根について

屋根の形状については、緩勾配屋根および陸屋根が採用されている。勾配屋根は、切妻、寄せ棟あるいは切妻・寄せ棟併用のものがある。勾配屋根に一部陸屋根を併用したものが最も多く、9軒のうち③菅野真湛氏の住宅、④-1二十坪前後の家、⑧郊外に建つ家(⑩某氏の家)、⑪住宅(⑬亀高邸)の4軒(44.5%)ある。次いで、勾配屋根のみ使用の建物は①K氏の住宅、⑦某氏の家、⑭新荘氏邸(和風)の3軒(33.3%)ある。陸屋根のみが使用されている住宅は⑮自邸並びに⑯高田氏邸の2軒(22.2%)ある。なお、緩勾配屋根は、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、④-1二十坪前後の

[表2-1]雑誌掲載の南信設計作品について

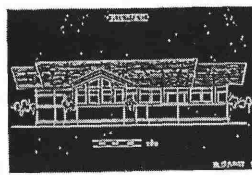
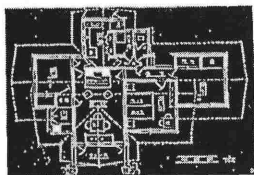
西暦	元号 誌名 巻号	番号	タイトル (建築名称等)	用途	解説文	写真	図面 平面図	立面図	配置図 (透視図)	室内 透視図	鳥瞰図
1926	大正15年2月 新建築 第2巻第2号	①	K氏の住宅	住宅	○	—	○	○	—	—	—
	大正15年3月 新建築 第2巻第3号	②	成る商店の 設計(改造)	店舗	○	○	○	—	—	—	—
	大正15年6月 新建築 第2巻第6号	③	菅野真湛氏の住宅 住宅付脚記(7)	住宅	○	○	○	—	○	—	—
	大正15年7月 新建築 第2巻第7号	④-1 ④-2	設計相談 二十坪前後の家	住宅	○	—	○	○	—	—	—
	大正15年9月 新建築 第2巻第9号	⑤	櫻根医院	医院	—	○	—	—	—	—	—
	大正15年10月 新建築 第2巻第10号	⑥	設計相談 事務所付住宅	事務所付住宅	○	—	○	○	—	—	—
	昭和2年5月 新建築 第3巻第5号	⑦	某氏の家	住宅	○	—	○	○	—	—	—
	昭和2年8月 新建築 第3巻第6号	⑧	郊外に建つ家	住宅	—	○ 模型	—	—	—	—	—
	昭和2年11月 新建築 第3巻第11号	⑨	『住宅に関する展覧 会』記事 会下山のアパート メント	集合住宅	—	—	○	—	—	○	○
	昭和2年11月 新建築 第3巻第11号	⑩	『住宅に関する展覧 会』記事 某氏の家	住宅	—	—	○	—	○	—	—
1928	昭和3年8月 新建築 第4巻第8号	⑪	住宅	住宅	—	—	○	—	○	—	—
	昭和3年10月 新建築 第4巻第10号	⑫	山の喫茶店	店舗	—	—	—	—	○	—	—
1929	昭和4年4月 新建築 第5巻第4号	⑬	亀高邸	住宅	○	○	○	—	—	—	—
1930	昭和5年1月 建築と社会 第13輯特集号	⑬-a	亀高邸	住宅	—	○	—	—	—	—	—
1932	昭和7年6月 住宅 第17巻第6号	⑭	新荘氏邸	住宅	○	○	○	—	—	—	—
1933	昭和8年10月 住宅 第18巻第10号	⑮	鹿姑居 (自邸)	住宅	○	○	○	—	—	—	—
1934	昭和9年9月 住宅 第19巻第9号	⑯	高田氏邸	住宅	○	○	○	—	—	—	—

[表2-2]その他の掲載書籍と作品について

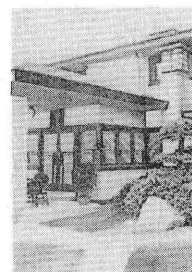
西暦	元号 書名 巻号	番号	タイトル (建築名称等)	用途	解説文	写真	図面 平面図	立面図	配置図 (透視図)	室内 透視図	鳥瞰図
1930	アルス建築大講座(合本)第1巻 昭和5年	③-a	菅野真湛邸 戸建1925	住宅	—	○	○	—	—	—	—
	アルス建築大講座(合本)第1巻 昭和5年	⑤-a	櫻根医院 大版1925	医院	—	○	—	—	—	—	—
	アルス建築大講座(合本)第1巻 昭和5年		山島邸(戸建1925 ライトと共作)	住宅(別荘)	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講座(合本)第1巻 昭和5年	⑩	神戸婦人同朋会館 (神戸1925)	?	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講座(合本)第1巻 昭和5年	⑲	日本絹綿紡績会社 (高橋1926)	?	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講座(合本)第1巻 昭和5年		亀高邸(神戸1928)	住宅	—	—	—	—	—	—	—
	アルス建築大講座(合本)第3巻 昭和5年	⑤-b	櫻根医院	医院	—	○	—	—	—	—	—
	近代建築画譜 近畿篇 昭和11年9月	⑤-c	櫻根医院	医院	—	○	—	—	—	—	—
1936	日本基督教団 仙台ホサナ教会 創立百周年記念小史	⑰	仙台バプテスト教会 昭和6年(1931)	教会	○	○	—	○	○	—	—

(1) 住宅

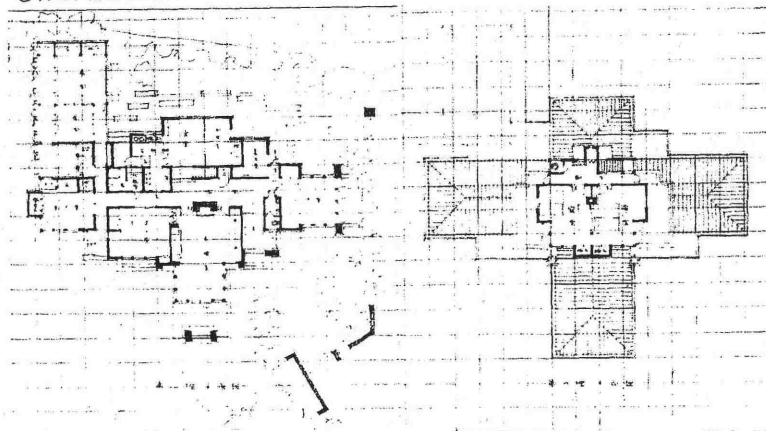
①K氏の住宅 (T15.02 新)



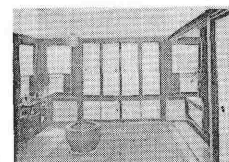
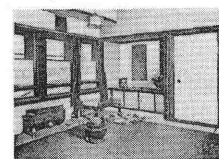
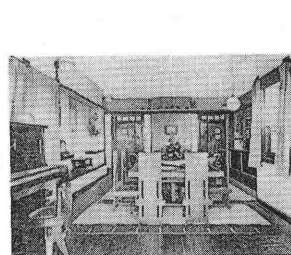
十字型平面
凹凸の多い平面
深い軒の出 水平線の強調



③菅野眞湛氏の住宅 (T15.06 新 S5ア)

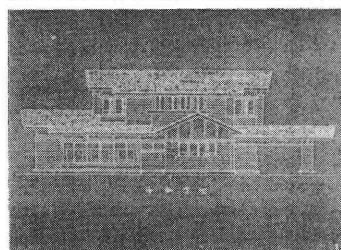
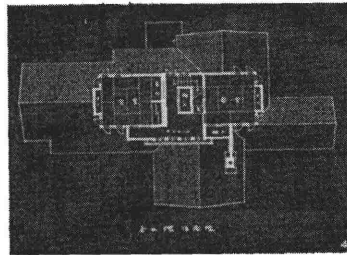
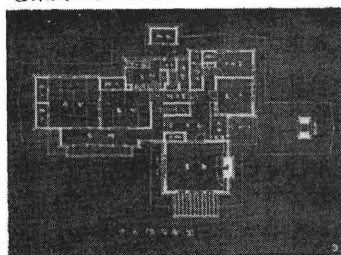


廊にバックハンドトリムが見られる



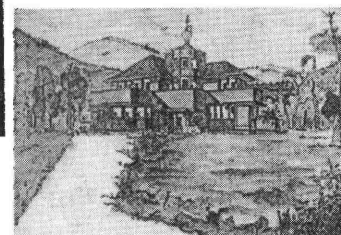
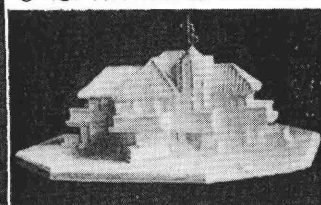
十字型平面
凹凸の多い平面
深い軒の出 水平線の強調
格子一部に鏡板がある建具

⑦某氏の家 (S2.05 新)



十字型平面 凹凸の多い平面
深い軒の出 水平線の強調
3面開放の室 窓に不均等割り格子の建具

⑧ (⑩) 郊外に建つ家 (S2.08 新)

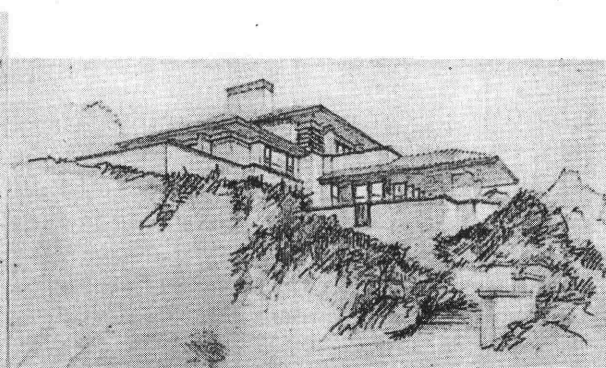
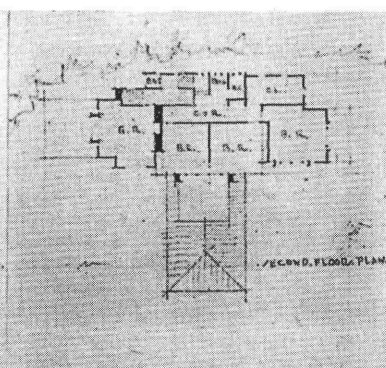
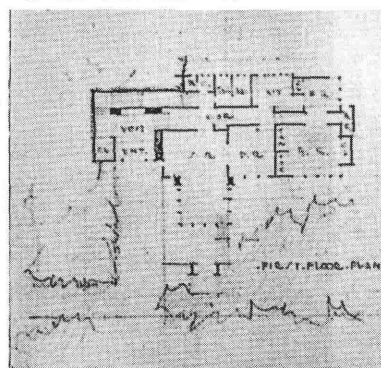


⑩ (⑧) 某氏の家 (S2.11 新)



十字型平面
凹凸の多い平面
3面開放の室 深い軒の出 水平線の強調

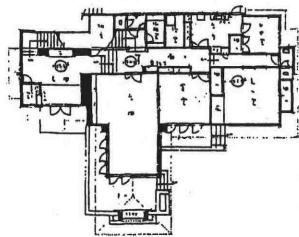
⑪ (⑬) 住宅 (S3.08 新)



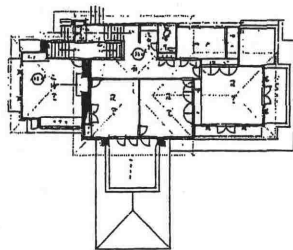
T字型平面 凹凸の多い平面
3面開放の室

深い軒の出
水平線の強調

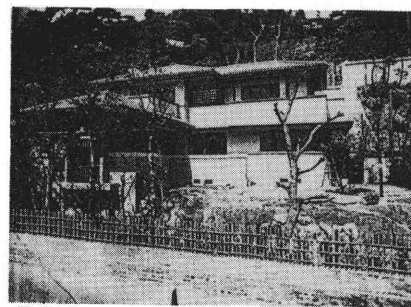
⑬ (Ⅺ) 亀高邸 (S4.04 新 S5.01 社)



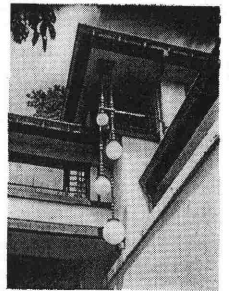
一階平面図 亀高邸
T字型平面 凹凸の多い平面 3面開放の室



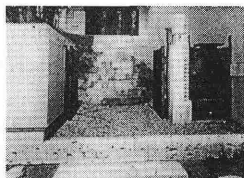
二階平面図 亀高邸



深い軒の出
水平線の強調



窓に不均等割り格子の建具



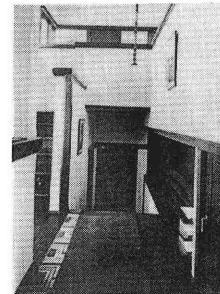
暖炉同様にデザインされた門柱



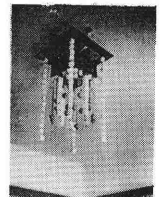
山邑邸と同様のデザイン椅子



門柱同様にデザインされて暖炉

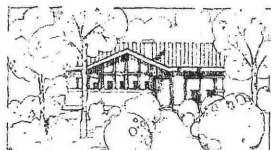
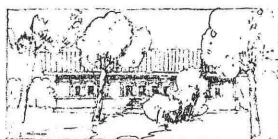
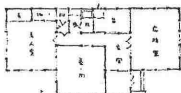


暖炉同様の建具デザイン



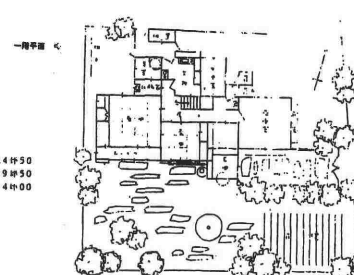
建物と統一の照明デザイン

⑭ 二十坪前後の家 (T15.07 新)

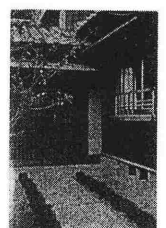


一文字型及び一文字変形型平面 凹凸の多い平面

⑮ 新莊君の家 (S7.06 住)

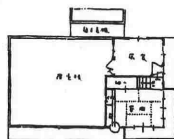
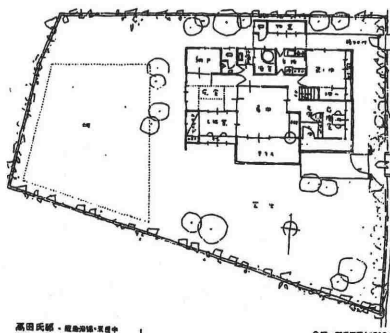


一文字変形型平面
凹凸の多い平面



和風

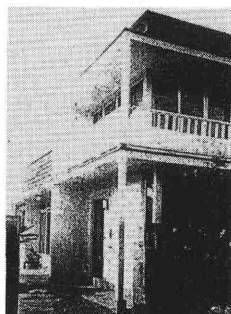
⑯ 高田氏邸 (S9.09 住)



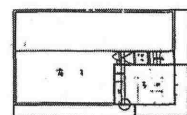
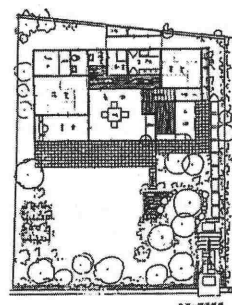
1階 全室 21.75坪
2階 全室 1.25坪
2階 全室 8.7坪



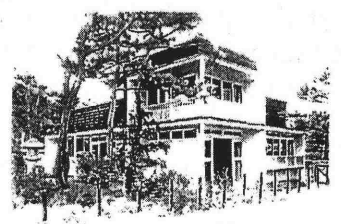
口字型平面
乾式工法
格子の無い引き違い建具



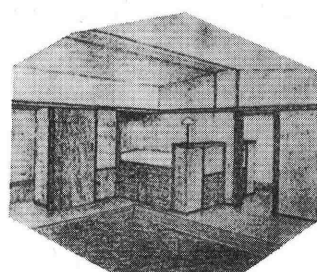
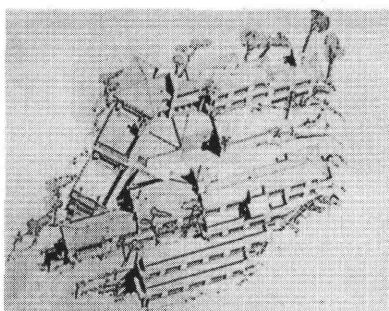
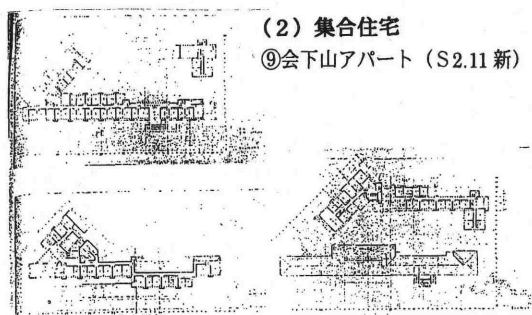
⑰ 鹿姑居 (自邸) (S8.10 住)



口字型平面
乾式工法
格子の無い引き違い建具

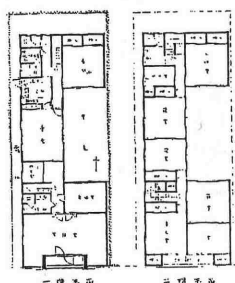


私家版『故伊東和雄小照』(S.8.11) より



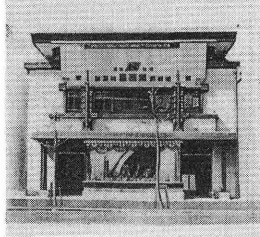
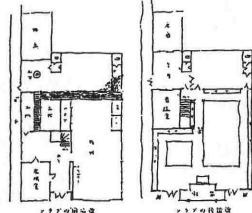
(3) 事務所付住宅

⑥事務所付住宅 (T15.10 新)



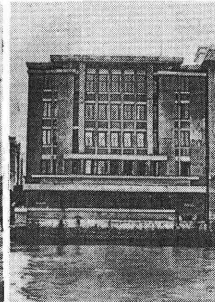
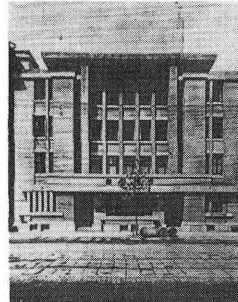
(4) 店舗

②或る商店の設計 (改造) (T15.10 新)

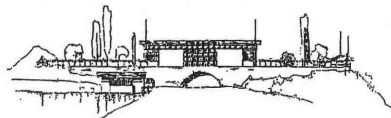


(5) 医院

⑤櫻根医院 (T15.09 新 S5ア S11 近)

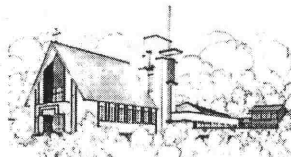


⑫山の喫茶店 (S3.10 新)



(6) 教会

⑩仙台バプテスト教会 (S55 史)



凡例: T=大正 S=昭和 新=『新建築』 社=『建築と社会』 住=『住宅』 ア=『アルス建築大講座』
近=『近代建築画譜近畿篇』 史=『日本基督教団仙台ホサナ教会創立百周年記念小史』

家、④-2 二十坪の住宅、⑦某氏の家、⑪住宅 (⑬亀高邸)、⑭新莊氏邸の6軒(7プラン) (67%) に見られる。また、9軒全てが深い軒を有している。

次に、ケラバの転びについては、①K氏の住宅、④-1 二十坪前後の家、⑦某氏の家、3軒 (33.3%)、鼻隠しの転びについては、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、⑦某氏の家、⑪住宅 (⑬亀高邸) の4軒 (44.5%) に確認できる。

(2) 水平線について

⑭新莊氏邸、⑮自邸および⑯高田氏邸の3軒を除いて6軒 (67%) に、軒の線、パラペット上端および内法高と腰高位置での押し縁による水平線を強調したデザインがみられる。

これら、深い軒、ケラバおよび鼻隠しの転び、水平線を強調した外観デザインは、ライトの建築に見られる特徴として知られておりW.ヒコック邸 (1900年) 他、多数のプレーリーハウスに見られる特徴と共通している³²。

(3) 太柱について³³

例えば③菅野真湛氏の住宅の1階南側や東側にみられるように、壁厚よりも大きい柱を<太柱>とすると、⑭新莊氏邸、⑮自邸、⑯高田氏邸の3軒を除いて、6軒 (67%) に太柱が使用されている。

(4) 窓建具の格子について

9軒のうち、⑭新莊氏邸、⑮自邸、⑯高田氏邸の3軒と確認で出来ない1軒を除いて、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、⑦某氏の家、⑪住宅 (⑬亀高邸) の4軒 (44.5%) の建具に均等割りで

はない格子が使用されている。例えば③菅野真湛氏の住宅には格子内の一部に鏡板をはめ込んだガラス窓のデザインが使用されている。

このデザインは、遠藤設計の萩原邸 (1924年、右図) ほか多くの住宅に見られるものに類似している。



(5) その他

[表3]の項目には挙げていないが、③菅野真湛氏の住宅の門扉には、例えばフランク・ロイド・ライトの設計したストックマン邸 (1908年) 他、外壁に使われている、「バックハンドトリム」と呼ばれるデザインの押し縁飾りを採用している。

2) 平面の特徴

9軒の住宅について、次の点が指摘できる。

(1) 平面の型

9軒の住宅の平面について類型化すると、a) 一文字型およびa') 一文字変形型、b) 十字型、c) T字型、d) 口字型の5つに分類できる。

a) 一文字型およびa') 一文字変形型 (2軒3プラン): ④-1・

④-2 二十坪前後の家、⑭新莊氏邸

b) 十字型 (4軒): ①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、⑦某氏の家、⑩ (⑧) 某氏の家

c) T字型 (1軒): ⑬亀高邸 (⑪住宅と同一建物)

d) 口字型 (2軒): ⑮自邸、⑯高田氏邸

a) 一文字型およびa') 一文字変形型については、例えば遠藤新自邸に見るように、中央の居間の両側に居室を、北に水廻りを配した



ストックマン邸

9軒のうち、①K氏の住宅、③菅野真湛氏の住宅、④-2 二十坪前

[illegible]

※1 : 同一建物
※2 : 同一建物「亀高邸」
ルーフバルコニーも陸屋根とした
(一) : 図面および写真による
(二) : 平面図による
(三) : 写真による

南信は明治25年(1892)2月13日に仙台に生まれ、大正6年に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、ライト設計の帝国ホテルの建設にかかわっている。大正11年秋には遠藤南建築創作所を遠藤と共同で開設し、同12年には兵庫県芦屋の山呂別邸(和館)

で設計活動が続けた。その後、大正14年に南建築事務所を設立し、主に兵庫と大阪で仕事をしたが、昭和10年に、満州で再び遠藤と共同の事務所を設けた。しかし、昭和18年に肺結核に感染し、その後療養生活に入ったが終戦となり、昭和21年11月に病院船で帰国した。戦後も引き続き療養生活を送り、昭和26年(1951)3月20日に仙台で没した。

南信の昭和4年以前の住宅作品にみられる特徴には、外観では、緩勾配屋根、深い軒、屋根のケラバおよび鼻隠しの転び、塔状の煙突、太柱、均等割りでない格子の建具、水平線を強調したデザイン、平面では、軸線が通り、室の凹凸が多く、部屋の3面に開口部がある設計で、太柱、開き窓の使用、暖炉がみられた。これらの点については、水平線を強調したデザインや3面開口の部屋、あるいはケラバの転びなどのようにライトや遠藤新の設計になる住宅とも共通した特徴がみられることも明らかになった。

その後、南信の住宅作品は、昭和4年から昭和7年の間に作風に変化が生じ始めている。特に昭和7年に竣工した自邸には、それ以前にはみられない作風の住宅が現れていることが明らかである。

なお、フランク・ロイド・ライトあるいは遠藤新の南への影響や彼の作風の変化については、稿を改めて詳細に報告したい。

謝辞

本研究をまとめるにあたっては、南信のご遺族をはじめ多数の方々のご助力を得た。ことに南信の義妹南範子氏には、長期に亘って貴重な証言および資料提供をして頂いた。また、満州時代に関しては南の甥岡繁氏に詳細な証言を頂いた。そして淀川製鋼所迎賓館館長柴田直義氏からは、伊東俊雄氏(南の義兄)から貴迎賓館に寄贈された『伊東和雄小照』を譲り受けた。また、産能大学理事長上野一郎氏からは有益なご助言を得、藤倉憲明氏には貴重な資料の提供を頂いた。以上の皆様に心から感謝申し上げます。

注)

- 1 作品に上野陽一郎(大正12年)がある:『建築画報』第5巻第6号(大正13年6月)口絵、pp.5。上野陽一(1883~1957):産業能率、科学管理法の研究者で、1950年産業能率短期大学を設立した。
- 2 後にレーモンドの下で後藤新平邸(大正11年)、リード博士邸(大正13年)を担当している。『アントニン・レーモンド作品集1920-1935』昭和10年 また『自伝アントニン・レーモンド』昭和45年に「ライトの周辺にいた若い建築家の中で最も親密だったのは内山隴三であった。」とある。
- 3 1889~1959 1917年コーネル大学卒業(卒業証書による)。遠藤新と同時期にタリアセンに滞在。1999年8月22日長男憲明氏からの聞き取り調査による。
- 4 『日本建築協会雑誌』第2巻第11号(大正8年)「会員消息 住所移転(特別費)伊藤清蔵 東京市麹町区帝国ホテル新築事務所」とある。
- 5 ライトを開け和室で撮影の写真(遠藤新氏所蔵)の裏に遠藤新夫人みやこのメモで「ライト氏、林さん、ミュラ氏、ばい、レーモンド氏、ヤングミュラさん、南さん、渡辺さん、河野さん、高橋さん、剣持さん、藤さん(東さん?)」の記入がある。「藤さん」とあるのは藤倉憲明氏である(憲明氏長男憲明氏所蔵の写真で同一人物であることを確認した)。
- 6 東京大学「木業会名簿2000」により大正6年37回卒業を確認。
- 7 「南信は1916年の東大建築科出身、初めトラスコン会社に勤め、帝国ホテルへは、トラスコンから派遣されました。」とある。『アルス建築大講座』合本第一巻(昭和5年)pp.155~156
- 8 追悼集『伊東和雄小照』(昭和8年11月):伊東の「略歴」に「大正11年10月遠藤南建築創作所二入所」とある。また、『アルス建築大講座』合本第一巻(昭和5年)pp.156に「ホテル完成後、遠藤新と共同で建築事務所を持ち、後独立して、大阪に事務所を持って居ます。」とある。

9 所在地:東京市神田区表猿楽町10番地同盟会館

10 過去何度もの聞き取り調査による。

11 この移転先については大正12年5月の『建築雑誌』に掲載されたものであることから、実際の移転は5月以前であると考えるのが妥当であろう。

12 1994年4月4日の聞き取り調査による。

13 『アルス建築大講座(合本)第一巻』昭和5年によれば「芦屋1925ライトと共作」とあり、山邑別邸は、ライトと南信の共作で、大正14年に竣工したということになる。

14 『建築と社会』第8巻第7号pp.35

15 南の義弟で所員でもあった伊東和雄の追悼集『伊東和雄小照』(昭和8年11月)の「略歴」による。「同(大正)十四年九月大阪に移り南建築事務所二入所、芦屋南方二寄寓」とある。

16 『建築と社会』第9巻第12号pp.42

17 南の義弟で所員でもあった伊東和雄の追悼集『伊東和雄小照』(昭和8年11月)の「略歴」による。「同(大正十一年)同(十月)遠藤南建築創作所二入所 同十四年九月大阪に移り南建築事務所二入所、芦屋南方二寄寓」とある。

18 『新建築』第3巻第3号 広告「南建築設計事務所 工学士南信 兵庫 県武庫郡(阪急沿線) 芦屋山坂 1537 電話芦屋 168」

19 『建築雑誌』第42巻508号pp.440「会員動静●転居転勤其他 正 南信君 事務所新設、大阪市中ノ島大阪ビル5階(土、6622)とある。

20 『建築と社会』第13巻第4号12頁「会報 第5部(住宅)委員会 南信氏(大阪ビル南建築事務所 電土6622)、『建築と社会』第15巻第10号広告pp.10に「大阪・北・宗是町、大ビル五階」とある。

21 「ダイビル株式会社」(株式会社大阪ビルディングが、昭和20年10月に大阪建物株式会社に、平成4年1月にダイビル株式会社に社名を変更)の会社沿革によれば、「大阪ビル」あるいは「ダイビル」は、大正12年10月に設立の株式会社大阪ビルディングの所有で、大正14年9月に大阪市北区中之島に竣工した、「ダイビル本館」と考えられる。後に、「新館」が「ダイビル本館」に隣接して建てられている。その年代が昭和12年7月であることから、『建築と社会』昭和7年10月号にある「大ビル」は「大阪ビル」は、同一ビルと考えられる。また、高橋洋二編集『城下町古地図散歩4大阪・近畿1]の城下町』(平凡社、1996)pp.30に「中之島古町名には、(中略)宗是町、(中略)など明らかに江戸初期以来中之島開発に携わったと思われる人々の名が冠されていた。」とある。これらのことから、『建築と社会』昭和3年4月号にある「中ノ島大阪ビル」と『建築と社会』昭和7年10月号にある「北・宗是町、大ビル」は同一所在地の同一建物と考えられる。なお、ダイビルは、現存する建物。

22 南の義妹にあたる南範子氏からの聞き取り調査(1999年11月~2002年8月)による。

23 南の義妹にあたる南範子氏によれば、南信の自邸には、昭和9年4月に南の妻雪子の兄である伊東俊雄(南範子氏の父)一家が、入居している。

24 満州での、南信個人の設計業績については確認できていない。なお、針岡繁によれば、「遠藤新・南信建築設計事務所」の仕事は、満州中央銀行関係、奉天(現瀋陽)の大きなホテル、住宅、事務所ビル等多数であった。

25 南範子氏の証言による。

26 南信の「籍謄本」の写しによる。

27 第2巻第2号附録、第2巻第3号pp.22~23、第2巻第6号pp.2~9、第2巻第7号pp.23~26、第2巻第9号写真版、第2巻第10号pp.34~36、第3巻第5号付録、第3巻第8号写真挿絵、第3巻第11号pp.16~19・pp.20~21、第4巻第8号挿絵・pp.22~23、第4巻第10号pp.1、第5巻第4号挿絵・pp.18~27・pp.28~29

28 第13巻第1号pp.6

29 第17巻第6号pp.345~346、第18巻第10号pp.606~609、第19巻第9号pp.144~148

30 第1巻pp.154~156、第3巻口絵

31 pp.224

32 B.H.ブラッドレー邸(1900)、S.L.ダナ邸他、ブレイリーハウスに多く見られる。殊にF.C.ロービー邸(1906年)は、水平線の強調された住宅として知られている。

33 南の設計と同様の太い柱が、遠藤新設計の山陽高等女学校校舎にある。『山陽新報』(大正14年4月3日)に、その太い柱についての記事があり、「太柱」と書かれている。この「太柱」の呼称を採用した。

34 亀高邸の竣工年は『アルス建築大講座(合本)第一巻』昭和5年pp.156の1928年を採用した。

(2003年2月10日原稿受理、2003年7月4日採用決定)